

調査報告・各地に伝承された横笛

著者	高桑 いづみ, 野川 美穂子
雑誌名	芸能の科学
号	32
ページ	41-70
発行年	2005-03-31
URL	http://id.nii.ac.jp/1440/00003095/



調査報告・各地に伝承された横笛

野 高
川 桑
美 いづみ
穂 子

- 一 須須神社の龍笛・高麗笛
- 二 石上神宮の神楽笛・横笛
- 三 紀州徳川家旧蔵・現日本芸術文化振興会蔵の龍笛「寛治丸」
- 四 和泉村朝日家の龍笛
- 五 紀州徳川家旧蔵・現国立歴史民俗博物館蔵の龍笛「青柳」「菊水」
- 六 彦根藩井伊家旧蔵・現彦根城博物館蔵の神楽笛
- 七 須磨寺の龍笛・高麗笛
- 八 西巖殿寺の高麗笛・龍笛

まとめ

雅楽は古くから全国各地で伝承され、その地の寺社の法要や神事、祭礼を荘厳してきた。地方の寺社には、その際使用した古楽器が少なからず残されている。なかには演奏から離れて久しいために著しく破損したものも多いのだが、破損箇所から制作過程がうかがえる場合が少なくない。また、名家のコレクションのなかにも、現在とは異なる製法による笛をみかけることがある。今回は対象を横笛に限り、制作過程を中心とした調査報告をおこなうこととした。

一 須須神社の龍笛・高麗笛

須須神社は石川県珠洲市内に位置する古社で、万治三年（一六六〇）に書かれた社伝縁起¹によると、崇神天皇の代に創建され、天平勝宝年間に現在地へ移ったと伝えられている。『延喜式』にもこの名がみえ、日本海の海上交通を守護する神として知られていたようだが、近世期には三崎権現とも称されていた。

ここに、国指定重要文化財の木造男神像五体と一緒に龍笛と高麗笛（図1）が残されている。この笛は、先述した縁起に「源義経奥州下向之時、適阻風波難於船中祈此神矣、俄而風波始定舳艫無恙也、於是寄附梵竹之横笛、以賽明神也、彼笛今尚在焉」と記述のある笛に比定されている。同社には「ほうくわん殿この笛をこのすゞのやしるにさゝげ給へるとなん ありしよの そのあらましをきくからに 袖さへぬれてねにそなかるゝ」と前田利家が詠じた色紙が残っている（図2）ので、桃山時代には義経ゆかり、という伝承ができあがっていたようだ。しかし、義経一行が現実に神社を来訪したのか否か、史料からは確認できない。

龍笛から見ていこう。全長三九・九センチ、標準的な寸法である。樺巻は歌口近くに残るだけ、指孔部分は下地も

はがれた状態である。歌口及び指孔部分は竹の表皮をはぐ、いわゆる谷グリを施している。この笛の特徴はセミである(図3)。現在では歌口の裏側、頭部寄りに唐木をはめこんだ部分をセミと称しているが、この笛では別材を用いずに小枝を除去しただけとなっている。だが、単に除去するだけでなく、その周辺のかなり大部を、跡が平らになるようスパツとそぎ落としている。除去した先には小枝跡がのぞいているが、ここは本来ならば樺で覆われている部分である。現在、樺は途中までしか残っていないが、本来は矢印で示したところまで樺が巻かれていたはずだから、樺を巻く前に小枝を除去した、と考えられる。

小枝の除去について詳述したのは、神社側で、この笛を「蝉折レ」の笛と伝えてきたからである。「蝉折レ」とは中国伝来の漢竹で制作した笛で、高松中納言実平が取り落としてセミを折ったところから名付けられた、と『源平盛衰記』に由緒が記されている。鳥羽院のときに制作された笛が高倉帝から平家へ、そして義経の手に渡り、暴風雨の難をのがれた礼に神社へ奉納されたという後日談が神社の『蝉折笛縁起』に記されているのだが、傍証はない。そぎ落としたようなセミの形状や節の太くて丸い異国風の竹材など、通常の横笛とは異なるイメージから「蝉折レ」と名付けたようだが、真偽はどうなのだろうか。制作上、小枝の切除が笛の成形前か後か、つまり樺巻を本来の細工と見るか後補と考えるか、という問題になる。

樺巻の下地をみてみよう。樺の破損箇所からは薄い経木を下地に巻いた名残がうかがえる(図4)。樺巻の長い箇所では現在でも下地として経木を巻くなどして形を整えるが、同じ製法である。経木の上にさらに和紙などを巻いた跡も見える。経木の上に部分的に黒く塗布した箇所があるが、塗布は部分的なので、経木がはがれた後の補修であろう。ここでは、樺を巻いた部分とはがれた部分で厚みにほとんど差がない点に注目したい(図3で樺巻が盛り上がりが見えるのは、はがれた樺が浮き上がっているため。図4が本来の厚み)。樺巻が後補であれば、当然その部分だけ厚みが増すはずである。厚みに差がないのは、当初より施されていた樺巻がはがれた際、はがれた跡を和紙や黒漆で

補修し、樺巻部分と同じ高さまで盛り上げた結果、と考えるべきであろう。現状を見る限りでは、少なくとも歌口部分では当初から樺が巻かれていた可能性が高い。とするならば、樺巻以前に小枝は除去されていたのだから、演奏前に取り落としてセミを折った「蟬折レ」の可能性はきわめて低い、という結論になる。

歌口から指孔にかけて、またセミより頭部側は樺が完全に外れている。歌口部分に樺が巻かれていたのだからここも樺巻を施していた、と考えるのが自然だろう。歌口から指孔にかけての部分では、現在では下地の和紙が残るのみで経木の断片などは残っていない。ここでは和紙は二重に巻いた様子がうかがえる(図5)。左親指を当てる部分は劣化しやすいので上側の和紙が破損し、その下に巻いていた和紙跡が見えているのだが、下の和紙は、理由は不明だが斜めに巻き付けている。技術的に未熟な者になったのか、あまり仕事ぶりが丁寧とは言えない。その上に再度和紙をきっちり重ねて巻いているが、現段階では和紙の上に樺を巻き直した様子はうかがえない。頭部側も、和紙を巻いて黒漆を塗布しただけで、樺は巻き直さなかつたようだ。頭部は木栓で留めている。現在では残っていないが、かつて錦を巻いていたのだろう。

指孔部分も、和紙を重ねて下地を盛り上げ、指孔との段差を形成している。おそらくその上に樺を巻いていたのだろうが、樺がはがれた後、巻き直したようにはみえない。

高麗笛は、全長三六・四センチ。龍笛以上に節の部分がふくれた特殊な竹を素材としている。節を際立たせるために頭部に節の太い竹を用いて歌口以下は別の竹で継いだり、下地を盛り上げて成形することもあるそうだが、破損箇所がなく肉眼では確認できない。樺を巻いた形跡が見られず、歌口と指孔部分をのぞいて全体に下地を施した後、黒漆を塗布しただけである。これが当初の細工かどうか肉眼では確認できないが、黒漆の状態をみると新しくはなさそう。セミの形状、小枝部分のそぎ落とし方が龍笛と共通している(図6)ので制作時期は同じであろう。同じように箱に収められていたにも関わらず、龍笛の著しい劣化にくらべて高麗笛で漆の剥落が見られないのが不思議だが、

使用頻度が異なっていたのだろうか。

二 石上神宮の神楽笛・横笛

奈良県天理市の石上神宮は、『日本書紀』などにも名のある物部氏ゆかりの古社で、神剣フツノミタマを御神体として祀っている。伝世品としては七支刀が有名だが、古くから鎮魂祭がおこなわれてきた。神事の際なにかしらの楽を奏したのだろうが、永禄十一年（一五六八）に尾張勢が乱入して拝殿や神庫を破壊し、宝物や文書が散逸したため古い史料が残っておらず、その実態は不明である。永享四年（一四三三）と書かれた額には、雅楽の楽人や田楽細男などが芸を披露しながら渡御する様子が描かれている。現在では雅楽を奏することもないようだが、宝物館に二管の横笛が所蔵されている。神事などで用いたのであろう。一管は六孔で全長四五・八センチ。典型的な神楽笛（図7）だが、もう一管は七孔で全長三四・六センチ。現行のどの横笛よりも短い寸法である。

神楽笛の指孔部分には、文字が彫られている。薄くなって判読しにくいが、明治政府の意向を受けておこなった壬申調査の際、蜷川式胤が直接彫ったものらしい（図8）。以下、判読できた部分を記す。

明治五・年壬申・八月神・宝檢・査・
 / 奉ス・依テ・此神楽・笛一・管・
 / 神・備・ヲ願フ・蜷川・式胤
 / 大・

この笛で最初に目につくのは、セミの位置である（図9）。通常、セミは歌口の裏側に位置しているが、この笛では歌口から少しずれた場所がセミになっている。セミといっても別材をはめこまず、小枝を除去しただけの自然な姿である。現在では頭部を別材で継ぐことが多いので、それと同じ製法であれば長年経つ間にズレが生じた可能性も考えられる。歌口から中をのそくと、頭部寄りに溝が確認できるから、このあたりで別材を継いだ可能性はあるのだが、

歌口からセミ部分にかけて漆の塗布面に亀裂が見られない。別材を継いだのならば塗布面が歪んだり連結部分が緩くなったりするものだが、そのような形跡は見られない。当初からセミの横に歌口を開けるよう細工をしてみた、と考えた方がよからう。笛の形状や制作に知識のない、または頓着しない者が作成したのだろうか。

歌口から第一指孔にかけて著しい破損があり、破損箇所からは、竹の上に経木をまきつけてその上を麻糸で巻き、下地を塗った上に漆を塗布した様子がうかがえる(図10)。樺巻は施していない。指孔部分も、下地の上に麻糸をラフに巻き、その上に黒漆を塗布したのみである。

一方、七孔の笛は巻きがほとんどはずれた状態で残っている(図11)。巻かれているのは樺や藤ではなく、和紙を糸状に縫ったものである(図12)。糸の下には下地を施した跡がうかがえないので、竹材に直接糸を巻き付け、その上に黒漆を塗布するだけのさらに簡便な製法だったらしい。竹は一材で、別材を継いだ跡はなく、セミはない。歌口と指孔部分に谷グりを施す製法は龍笛と同じだが、龍笛に比べると頭部が異様に短く、頭部が欠けた可能性も考えられる。しかし頭部先端はカーブをつけるようになだらかに削った上に、黒漆を塗った跡が残り、木栓には錦もつつすから残っている。歌口から第一指孔までの寸法も通常の横笛より短く、指孔の間隔も通常の龍笛と同じではないので、おそらく現存の寸法が当初の姿であろう。寸法が短い分、ピッチは当然高からう。また、現行の雅楽の笛では歌口と管尻の中間に第二指孔をうがつのに、この笛では中間点が第三指孔にあたり、第一指孔は、歌口と管尻の距離を三分した箇所を開けられている。音律のバランスも雅楽の笛とは著しく異なりそうだ。雅楽以外の音楽、芸能に用いた可能性が高いのではなからうか。

三 紀州徳川家旧蔵・現日本芸術文化振興会蔵の龍笛「寛治丸」

紀州徳川家十代藩主治宝（一七七一―一八五三）が蒐集した雅楽器コレクションの大半は、現在国立歴史民俗博物館の所蔵となっているが、紀州徳川家から移管する際、別の経緯を経て独立行政法人日本芸術文化振興会（国立劇場）の所有となったものが九点ある。そのうち、龍笛「寛治丸」は古い製法によっているので、「こ」で報告したい（図13）。『集古十種』には「紀伊家御蔵笛図 号寛治丸 白河帝熊野行幸所用」と記載がある（図14）が、これは熊野本宮社人が寛政十二年（一八〇〇）に記した楽器の付属文書「白河院熊野行幸之節於本宮被奏管弦 其時之古管之由申伝候」に基づくらしい。真偽のほどは不明である。寛治年間（一〇八七―九四）は白河天皇の在位期間にあたるので、この時期に行われた熊野行幸にあやかって命名されたのであろう。全長四〇・一センチ。歌口と指孔部分に谷グリを施さず、小枝除去後の虫食い跡をセミとしている（図15）。小枝をはらった跡が長く歌口方向に走っているので、頭部を別材で継ぐことなく一材で成形したようだ。材は、節が丸く太い竹である。樺巻をせずに、和紙で下地を形成した上に黒漆を塗布する簡便な工程で造られている（図16）。おそらくこの加飾をさすのだろうが、『集古十種』では歌口と指孔の中間部分に「アコメ漆ヌリ」と記している。正確な意味は不明だが、興味深いことに、彦根城博物館蔵の龍笛「斑鳩丸」と「孔雀丸」も目録『楽器類留』に「あこめ巻」と書かれていた。「孔雀丸」は未調査で確認していないが、「斑鳩丸」は、セミの形といい黒漆を塗布しただけの外見といい「寛治丸」と同じような製法の笛である（図17）。「アコメ漆ヌリ」「あこめ巻」は同義であろう。小学館刊『日本国語大辞典』によると、「あこめ」とは単衣と下襲の間身につける衣服で、上衣を着ずに「あこめ」だけである姿を「あこめ姿」とも言うらしい。樺巻が標準となっていた江戸時代に、樺巻をせずに下地だけ施したように見える笛に「あこめ姿」との共通性を感じて命名したのではないだろうか。楽家らしい雅な発想とでもいうのだろうか。なお、現国立歴史民俗博物館蔵の龍笛「菊水」の付属文書にも「あこめ」に関する記述があらわれるが、詳細については後述する。

四 和泉村朝日家の龍笛

福井県大野郡和泉村の朝日家には、「青葉の笛」と呼ばれる一管がある(図18)。かつての笛箱の材と推定できる板には「平治二年正月二十一日よりこれを代々うちの神とゆはひたてまつるべし(表面)」「御はたはくまの御やしるにおさまらせ給ふ これもよしひらの御はたしそんうちの神とつかう申すべし(裏面)」「朝日山 山神 朝日のせんそあくけんたよしひらの 御ふゑ末代のしそんにおいてうちの神たるべし(表面)」「との記述があり、「悪源太」の異名で知られる源義平ゆかりの笛とする。一六〇六年書写の朝日家所蔵文書によれば、平治の乱に敗れて村に逃げ落ちた義平が、上京の折に村の豪族・朝日助左衛門の娘に与えたものという。娘が宿す我が子への形見として、旗、太刀、武器などとともに託したとし、笛は八幡宮(現在は熊野神社に合祀)のご神体となった。『城迹考』『絵図記』『帰雁記』『名勝志』など、一八世紀前半以降の地誌類にも、来歴を含む紹介文が載っている。現所蔵者は、朝日義治氏(義平から数えて三十九代目)である。

この義平伝説には傍証がなく、当該楽器を平安末期の笛とする確実な根拠もない。しかし、後述するように、現在の製法と違う特徴は見られる。

笛は、第五孔より管尻まで欠損し、現存の全長は三四・〇センチ。現行横笛類の寸法から推測すれば、龍笛である。歌口や指孔部分などを除き、巻きと黒漆の塗布がある。内壁にも黒漆がみとめられる。巻きは、糸状の樹皮を用いていない。巻き表面の規則的なひび割れから判断して、やや幅広に成形した樹皮が使われている(図19)。桜の樹皮かどうか確認できないが、「平樺巻」「太樺巻」と呼ばれる製法である。歌口および指孔部分には、現行の製法に見られる谷グリがない。また、セミと歌口間の部分、歌口と第一孔間の部分に、経木などを用いた肉盛りの下地もない。セミ部分は、小枝を除去したままの状態である(図20)。歌口からセミ部分の節にいたる管内に蜜蝋などの残存物は

ないが、かつては何かを詰めていた痕跡の変色がある。頭端にも、錦などの残存物はない。本体を持ち上げた感触からすると、セミ部分の節から頭端の間には、現行の横笛類に見られる重りは入っていない。

この笛の材は、鹿児島県国分市清水の台明寺および日枝神社の近辺より産出した「青葉竹」である可能性を、美濃晋平氏が指摘している。⁹³ 台明寺は、『鹿児島県資料 旧記雑録前編』に所収される台明寺関連の文書類、『三国名勝図絵』『東西遊記』『鹿児島県史料 鷹藩名勝考』などの記述から、天智天皇時代以降、宮中に献上する笛用の竹藪を管理する場所として定められていたとい⁹⁴。台明寺跡地の日枝神社には現在も竹藪が残っており、竹の種類は寒山竹である。美濃氏は、朝日家の笛箱内から採取した笛の破片、日枝神社の寒山竹、二百年は経過していると思われる煤竹（竹の種類は篠竹と推定）、千葉県産の現在の篠竹の四種類について、走査電子顕微鏡を用いた細胞の形状の比較を行い、朝日家の笛が日枝神社の寒山竹に近いとの所見を発表している。⁹⁵ 笛用の竹の種類、歴史的推移や地域差、個体差に関する研究がほとんど行われていないのが現状であり、この美濃氏の所見をどう判断するかについての言及を、ここではひかえる。

五 紀州徳川家旧蔵・現国立歴史民俗博物館蔵の龍笛「青柳」「菊水」

国立歴史民俗博物館（以下「歴博」と略す）が所蔵する紀州徳川家旧蔵の雅楽器コレクションには、二十五管の龍笛が含まれている。ここでは、朝日家の横笛に見られた「平榊巻」の製法に関連して、「青柳」と「菊水」をとりあげることにする。

「青柳」（図21）は、紀州徳川家のコレクションの中でも特筆すべき由緒を持つ。付属文書によれば、応永五年（一三九八）、足利義満より大神景秀がもらい受けた。將軍職を辞し、造営した北山第を中心に政治的にも文化的にも

絶対的な権力を握っていた時代の義満より拝領したといういわれのある楽器である。代々伝えられ、文政八年（一八二五）、大神景典より紀州徳川家への召し上げとなった。¹⁰ 景秀（？）一四一五）および景典（一八一〜一八六七）の属する京都方大神家は、笛を主業とする楽家の代表である。

笛は全長四・センチ。歌口と指孔の部分の竹の表皮をはいでいるが、谷グリと言えるほどの深さはない。経木などによる肉盛りの下地もなく、管全体の厚みには凹凸が少ない。特徴的なのは管表面の光沢である。糸状の樺を巻いていない。二〜三ミリ幅の樺を巻いているように見え、その上に透漆が施されている（図23）。「平樺巻」である可能性が高い。部分的には、黒漆も混じる。別材で成形したセミを埋め込み、本体の材との境界線を朱漆で塗っている。セミ部分の表側（歌口や指孔のある面）にも、縦縞の朱漆がある。後述するように、この笛には補修部分が多く、セミも後補の可能性が高い。線状の朱漆も、装飾というよりは、割れの修理跡であろう。歌口の周囲には朱漆を塗り、管内には赤味を帯びた茶色（弁柄）の塗布がある。歌口近くに蜜蝋が残る。金襴で包まれた木栓で頭部先端をふさいでいる。

この笛は、かなり使い込まれている。左右の親指のあたる部分が摩耗しており、スレた部分を透漆で補修している。歴博の行った透過X線調査によれば、歌口と指孔との間の管内には、別の細い管が入っている。外側の管（本体の管）の割れを補修する目的で、入れ子式にしたのだろう。構造としては、能管の喉と同じである。

「菊水」（図22）は、京都方の楽家である安倍季考（一七七七〜一八三七）が所持する笛を見た関白・一条忠良（一七七四〜一八三七）によって、「落梅」という新たな銘が付けられた。忠良自筆の銘書と季考による由来書が残る。その後、「菊水丸」に変わった。銘書と由来書に付けられた貼紙には、「菊水丸と御改癸卯仲冬」と記されている。忠良、季孝の生没年、楽器蒐集を行った徳川治宝の生没年から考えて、「癸卯」の年代は天保十四年（一八四三）であろう。

「菊水丸」への改銘の事情はわからないが、笛筒は金平時絵で菊水文を描く意匠であり、銘と対応している。現在は、「菊水丸」ではなく「菊水」とする⁽⁵⁾。

季考の由来書には、興味深い一文がある。「右笛（筆者注：落梅）作かた等 御意二叶候二付、当時御吹料古笛 勅銘葉風与申候御笛、落梅同様二あこめ装束之写被仰付候」とある。この笛の製法が気に入ったので、葉風という銘の笛も、この笛と同じ「あこめ装束」にしてほしい、という内容である。「あこめ装束」は、「寛治丸」の項で述べた『集古十種』の「アコメ漆又リ」や『楽器類留』の「あこめ巻」との関連を思わせる。樺巻をせず、下地の上を漆で塗布する製法を指しているのではなからうか。

笛を見てみよう。全長三九・七センチ。歴博の解説には「平たい樺を巻き、樺巻表面には黒漆塗、その他を透漆塗とし、内側は朱漆塗とする」とあり、「平樺巻」とするのだが、どうだろう。光沢のある表面にはアブク状の細いスジがある（図24）。このスジの判断が難しい。下地の上を黒漆で塗り、その表面にスジをつける細工であるように見える。透過X線写真⁽⁶⁾でも、管の表面に細かい凹凸が見える。糸状の樺巻を施す「初蟬」や銘のない龍笛のX線写真との著しい違いはないので、糸状の樺巻を巻いている可能性も否定できないが、少なくとも「平樺巻」ではなさそうだ。由来書の「あこめ装束」という表現から考えると、樺巻を巻かずに下地の上に黒漆を塗布し、樺巻に似せてスジを付けたのではないだろうか。セミ部分は、小枝を折ったのみで、凹凸をそのまま残している。歌口と指孔部分の竹の表皮をはく、谷グリが施されている。指孔部分がスリ減っており、使い込まれた笛である。X線調査では、歌口と指孔との間の管内に、別の細い管が内蔵されている。

六 彦根藩井伊家旧蔵・現彦根城博物館蔵の神楽笛

彦根城博物館には、彦根藩主十二代井伊直亮（一七九四—一八五〇）が蒐集した楽器コレクションが所蔵されている。雅楽器が多く、笛類も含まれている。その中に、「平樺巻」の製法による神楽笛がある（図25）。

『楽器類留』には、「古管」、「樺赤色平かば巻」と書かれている笛で、井伊家には、嘉永三年（一八五〇）七月に受け入れられた。付属文書があり、室町時代の笛とされる。

全長は、四四・二センチ。歌口と指孔部分を除き、樺が巻かれている。糸状ではなく、幅広に裁断した樺を、ずらしながら重ねて巻いている（図26）。その上を透漆で塗っており、赤茶色の光沢がある。表面の漆が剥落している部分には、二層を成す下地が見える。現行の神楽笛と同様、経木などによる肉盛りの下地はなく、歌口や指孔部分の谷グリも施していないので、すっきりとした姿である。セミ部分は、小枝を除去したのみである（図27）。頭部先端をふさぐ木栓には、錦が残っている。

七 須磨寺の龍笛・高麗笛

須磨寺は、寺蔵の略歴縁起によると仁和二年（八八六）、光孝天皇の勅命により聞鏡上人が須磨上野山福祥寺を建立し、海中より出現した聖観世音菩薩を本尊として祀った、といういわれのある寺である。ここに寿永三年（一一八四）、一ノ谷の合戦で熊合次郎直実に討たれた平敦盛が所持した、と伝えのある横笛が収められている。

件の笛はおほぢ忠盛笛の上手にて、鳥羽院より給はられたりけるとぞ聞えし。経盛相伝せられたりしを、敦盛器量たるによつてもたれたりけるとかや。名をばさ枝とぞ申ける

という『平家物語』の記述に従えば笛の名は、「小枝」だが、一般には青葉の笛として知られている。「青葉」と呼ばれるようになったのは、能「敦盛」に

小枝蟬折様々に、笛の名は多けれども、草刈りの、吹く笛ならばこれも名は、青葉の笛と思し召せ、

と謡われたことに由来するらしい。敦盛の笛と伝えのあるものは、北海道檜山郡江差町の姥神大神宮にも奉納されている²⁹⁾。父経盛に送られた遺品の笛を五木に隠れ住んだ平家の残党が伝え、その子孫市来政胤が渡道した折りに奉納した、と言われている。福井県大野郡和泉村にある笛資料館の展示パネルによると全長三八センチ。七孔の横笛で両端に骨製飾りをはめこみ、歌口のそばに平家の家紋梅鉢を彫り、中央近くに房がついているらしい。いずれが敦盛の笛なのか、現時点での判断はひかえておく。

さて、須磨寺が所蔵しているのは龍笛と高麗笛の二管で、現在、二管とも厨子のなかに収められている(図28)。「小枝」と呼ばれているのは龍笛だが、この笛は実際セミの部分に小枝を残していた(図30)。管の途中が破損しているため、厨子から取り出しての調査はかなわなかったが、前述した笛資料館の展示パネルには全長三九・二センチ、と記されている。小枝部分は三本に枝分かれしたものをそのまま用いたように長さは五・五センチから六・五センチ、歌口の裏あたりで折れているが、当初はもう少し長めだったのだろう³⁰⁾。小枝の下にも樺を巻いている。全体の厚みは一樣で、歌口から指孔にかけて経木等で下地を成形した様子はなく、黒く塗った下地の上に直接樺を巻いている(図29)。指孔、歌口ともに谷グリは施していない。

寺伝では高麗笛も敦盛愛用としているが、全長三七・四センチ(図31)。標準的な寸法より一センチほど長い。この笛でもっとも目立つのはセミの部分である。小枝を払った跡が丸く盛り上がったままで、削るなどの細工をしていない(図32)。現在まで調査した笛では、払った跡がへこんでいるものがほとんどだったので、盛り上がったセミは異様に見える。歌口、指孔とも谷グリを施さないのは高麗笛だから当然だが、その部分も樺巻の下地と同じように黒く塗布した跡がみえる(図33)。龍笛同様、樺巻の下地として経木を巻かず、シンプルな成形である。指孔が小さく、直径が六ミリしかないのも目につく。

全長が一センチ長いために指孔をあける位置が管尻方向に一センチずつずれており、そのために歌口と指孔のバランスが現行の高麗笛とは少々異なっている。前述したように、現行の笛は歌口と管尻の中央に第二指孔をうがっているが、この高麗笛は、第二指孔と第三指孔の間が中央になっていた。音律の変更があるのかどうか、それが古制なのかどうかは検討中である。

寺伝の『当山歴代』⁽²⁾には、応永三四年（一四二七）、赤松満祐追討のため着陣した細川軍が須磨寺を破壊した際名物とされた「小枝」を掠奪したが、翌年寺に返納した由が書かれている。ただし、寺は延文五年（一三六〇）の大火で金堂・釈迦堂・鐘樓を焼失し、大半の仏像と経典、法具を失っている。笛だけが焼け残る可能性は、少なからう。その後、勧進などを通して復興がはじまり、応安四年（一三七一）年、金堂上棟の折りには観世大夫（おそらく観阿弥）による勧進猿楽が催され、応永五年（一三九八）には琵琶法師石見検校を願主として鎮守権現が造立された。『当山歴代』の翻刻を担当した戸田芳実氏は、解題の中で「平家琵琶が平敦盛とその笛を須磨寺に結びつけたであろうことは容易に想像される」と推測されたが、その可能性は充分考えられよう。また、応永三〇年の奥書を持つ世阿弥伝書『三道』は、「近来押し出だして見えつる世上の風体の数々」として能「敦盛」を挙げている。能にあやかって笛を制作した可能性も考えられなくはない。敦盛の時代まで遡れるかどうかの判断は置くとして、制作の点では古体と認められる。少なくとも応永時の『当山歴代』が言及する「小枝」は現存する笛をさす、と考えて大過なからう。

その後、明応七年（一四九八）の堂舎上葺等修造のため沙門弘源が記した勧進帳に「青葉笛」があらわれるほか、大永六年（一五二六）に講堂を上棟した際、本尊、敦盛絵像、青葉の笛を展観したり、天正十六年には青葉笛の拝観料収入で仁王門を新築するなど、寺宝として開帳をくりかえしてきた。そのような経緯があったためであろうか。江戸時代の模作が、山口県の赤間神宮に収められている（図34）。笛筒には「享和改元年酉年戴大隅国嚙啖郡清水山中

台明寺之竹使工人神太氏造笛云」と金字で、また笛の箱の裏には「龍笛青葉模者上田正教工人使神太氏造今豊前小倉藩山内為規之所持于時文政戊子年初夏於江府試笛声律最好 正六位左近衛将曹太神朝臣景（花押）」と書かれている（図35）。須磨寺の笛を模写したのかどうか不明だが、セミの部分には小枝を残している。

八 西巖殿寺の高麗笛・龍笛

西巖殿寺は阿蘇山の麓に位置し、古くから阿蘇神社と関係のあった寺院である。神龜三年（七二六）に、天竺より来朝した開祖最栄が十一面観音像を造立したのが始まりとされている。もとは山頂に本堂や山王堂などさまざまな院坊が立ち並んでいたが、天正年間にいったん衰退した後江戸時代に再興され、行者・山伏が峰入りをおこなったりしていた。平成十三年九月二十二日に不審火により根本中堂が焼失し、中に安置されていた十一面観音像などは焼失してしまつたが、龍笛二管と高麗笛は熊本県立博物館に寄託されていた関係で焼失を免れている。

当該楽器は、天文六年（一五三七）の奥書を持つ『福万坊寿快武具文書等注文』⁽²⁾に「ふゑ二くわん、同こまふえ一くわん」と記載のある「ふゑ」と「こまふえ」に相当する可能性が高い。龍笛は全長四〇・四センチ（以下アとする）と四〇・三センチ（以下イとする）、高麗笛は三五・九センチ。いずれも標準の寸法を持ち、標準的な製法によっている。高麗笛は劣化が少なく、指孔付近の樺巻が二方所はずれているだけだが、龍笛は破損が著しい。その理由は後述することにして、高麗笛から制作についての報告を行いたい。

高麗笛（図37）には樺巻が施されているが、指孔部分の剥落箇所を見ると下地を施した形跡がみられない。頭部から指孔までの箇所も、特にふくらみがないので経木などで下地を形成せずに直接樺を巻き、黒漆を塗布した、と考えられる。セミは、小枝を除去したままの自然な姿である（図38）。

龍笛は二管ともほぼ同じ製法によっている(図39)。歌口と指孔部分には谷グリを施し、セミから歌口、歌口から第一指孔までは竹材の上に経木を巻いて成形した後、樺を巻いて漆を塗布する標準的な製法である。ただし、歌口・第一指孔間では歌口に近い部分は和紙のみで下地を成形し、途中から経木を巻いたことが確認できる。指孔間にも下地を施し、その上に樺を巻いたようだ。セミに関しては唐木を埋め込まず、小枝をはらった跡の虫食い部分をセミとしている。

龍笛に関しては著しい破損が見られたが、実はこれは近年の現象だったらしい。昭和五七年に熊本県立美術館が発行した『県内主要寺院 歴史資料調査報告書(一) 城北地区 図版篇』には、樺巻がはずれた様子もなく写真に収められている。その後寺の手を離れてどのように管理されていたのかわからないが、わずか二十年の間に劣化を招いたことになる。保管の重要性を痛感せざるを得ない。

まとめ

龍笛と言えは、ほぼ全体に樺を巻いて黒漆を塗布し、歌口の裏側には唐木製のセミをはめこんだ横笛というイメージがある。ところが、名家のコレクションや地方の社寺では製法の異なる笛を見かけることが少なくない。今回調査した笛をまとめながら、笛の制作史を大まかに追ってみた。

もつとも簡便な製法による笛は、石上神宮の七孔の笛である。下地も施さず、糸を巻いた上に黒漆を塗布するだけである。雅楽器としては簡便すぎるのではなからうか。全長も雅楽器とは異なるので、雅楽以外の民間音楽で使用された可能性を考えたい。

次に単純なのが旧紀州徳川家の「寛治丸」と須須神社の高麗笛である。いずれも和紙を張って下地とした上に黒漆

を塗布するだけで、樺を巻いていない。節が太くて目立つ竹を材とする点も共通している。谷グリを施さず、下地の経木も樺巻もない製法は、正倉院所蔵の七孔横笛を現存する初例として、広島県福山市安国寺の阿弥陀三尊像の胎内から発見された龍笛にも共通する特徴である。阿弥陀像の造立は文永元年（一一七三）なので鎌倉時代にこのような製法が確立していたことは確実だが、寛治年間（文永より二百年も遡る。笛の由緒に従えば平安末にこのような製法がおこなわれていたことになるが、由緒の真偽を確かめるすべのない現在では、判断はひかえたい。『芸能の科学』³¹）では安国寺の笛と同じ製法の作例として彦根城博物館蔵「斑鳩丸」や東京国立博物館蔵「はまつと」も報告したが、これで同様の手法による作例が五管となった。樺巻のない製法は、かなり普及していたのではなからうか。石上神宮の神楽笛も、経木で下地を作っているが樺は巻いていない。樺巻がどこまで一般的だったのか、考え直す必要がある。そうだ。なお、樺巻のない製法に関して江戸時代には「あこめ巻」と呼ぶこともあった由、再言しておく。紀州徳川家旧蔵の「菊水」を一条忠良が気に入ったのも、その姿に古制を感じたからであろう。

次の段階は朝日家の「青葉の笛」、紀州徳川家旧蔵の「青柳」、彦根城博物館の神楽笛である。樺は巻いているが糸状に成形した樺ではなく、やや広めに裁断した樺を重ねて巻く、いわゆる「平樺巻」である。経木などによる下地もない。樺巻の差異は単なるデザイン上の問題なのか、制作時期、制作者の問題なのか不明だが、現在ではあまり見かけない手法である。

今回調査した笛は、須磨寺の龍笛と後補の可能性のある紀州徳川家旧蔵の「青柳」を除くと、小枝部分を除去しただけの簡素な作りであった。須磨神社の龍笛はおそらく樺巻が本来の姿であろうし、西巖殿寺の笛も経木を下地に用いてその上に樺を巻くなど現在と変わらぬ製法によっているのに、セミだけはいたって古風である。西巖殿寺の笛は文書の通り天正時代までは遡ることが可能だろうが、その時期になっても簡素なセミの笛が吹奏されていたのは興味深い。敦盛の笛にならって枝を残した模作は赤間神宮のほか彦根城博物館蔵の「義経丸」、紀州徳川家旧蔵・現国

立歴史民俗博物館蔵の「小枝」などがあり、「蝉折レ」や「葉二」などセミにちなんだ逸話も残されている。演奏に直接関係する箇所ではないのだが、なぜ姿にこだわったのか、こだわったにしては簡素な細工しか残っていないのはなぜか、などセミに関しては問題も多い。唐木を埋め込む製法は『楽家録』に記されているので元禄時代には行われていたのだろうが、一般化したのは江戸期に近い時期なのかもしれない。能管との影響関係も考慮すべきだが、それは次の課題としたい。

今回の調査に当たっては、所蔵者各位また関係諸機関にさまざまな便宜をはかっていただいた。所蔵者各位をはじめとして、間にたつてくださった珠洲市教育委員会の平田秋氏、熊本県教育庁の丸山伸治氏、一部の調査に同行してくださった田中敏長氏・大橋彩子氏に深謝申し上げる。

注

- (1) 『珠洲市史』第四巻資料編 一一四八頁(珠洲市史編さん専門委員会編 一九七九年二月)
- (2) 前掲『珠洲市史』同頁
- (3) 田中敏長氏談(二〇〇四年七月)
- (4) 齋藤望・渡辺恒一「資料翻刻『楽器類留』上」一二五頁(彦根城博物館研究紀要 第七号 一九九六年三月)
- (5) 図18の板三枚のうち、下の二枚に書かれている。上の一枚は、下二枚より新しい箱の板。
- (6) 美濃晋平『源義平』(福井県大野郡和泉村教育委員会 一九九三年五月)二三八―二四二頁
- (7) 美濃晋平『青葉の笛』(福井県大野郡和泉村教育委員会発行 一九九一年三月)
- (8) 前掲『青葉の笛』
- (9) 宮澤厚子『臺明寺と青葉の笛』(『笛の文化史』創刊号 一九九五年三月)
- (10) 一九九二年五月一七日、福井県和泉村社会教育福祉総合センターで開催された「フォーラム青葉の笛」における発表(『フォーラム青葉の笛 記録集』和泉村教育委員会・青葉の笛保存顕彰会 一九九二年五月)

- (11) 『紀州徳川家伝来楽器コレクション』(二) 四年 国立歴史民俗博物館) 六四・三五―一頁
- (12) 一九九二年十一月四日、有楽町マリオンで行われた第十二回歴博フォーラム「コト・フエ・ツツミ・銅鐸 日本楽器の源流と日本的改造」で、調査結果が報告された(『歴博フォーラム・日本楽器の源流 コト・フエ・ツツミ・銅鐸』一九九五年 国立歴史民俗博物館)
- (13) 前掲『紀州徳川家伝来楽器コレクション』三五八・三五九頁。
- (14) 紀州徳川家の楽器コレクションの目録『財団法人松江博物館所蔵 雅楽器総目録』(島根県立博物館 一九七一年)でも「菊水」とする。
- (15) 前掲『紀州徳川家伝来楽器コレクション』八三頁
- (16) 前掲『歴博フォーラム・日本楽器の源流 コト・フエ・ツツミ・銅鐸』一一五頁にX線写真が掲載されている。
- (17) 齋藤望・渡辺恒一「資料翻刻『楽器類留』下」、『彦根城博物館研究紀要』第十号 一九九九年三月) 七八頁
- (18) 『日本の楽器 織りなす音・雅びの世界』(彦根市教育委員会 一九九六年十月)
- (19) 前掲『青葉の笛』
- (20) 前掲「フォーラム青葉の笛」における竹研究家浜田甫氏の発言によると、カンザンチクは枝が五本、ヤシャダケは枝が三本出るそうである。その説に従えば、須磨寺の龍笛はヤシャダケ製である。
- (21) 嘉応二年(一一七〇)から宝暦二年(一一七五)まで歴代の住持が書き残した記録。『須磨寺 当山歴代』(監修・小池義人 校倉書房 一九八九年三月)に影印とその読み下しがまとめられている。
- (22) 大日本古文書(東京帝国大学文学部史料編纂所編纂)家わけ一三 三に翻刻(一九三四発行 一九七一年覆刻) 一三四頁
- (23) 高桑いづみ・野川美穂子「鎌倉時代に制作された横笛」、『芸能の科学』³¹二〇〇四年三月

【法量表】

所 藏	石上神宮		須弥神社	振興会「高治丸」	朝日家	匠博「青柳」	匠博「菊水」	須磨寺	西蔵殿寺	西蔵殿寺
	種 類	(七孔)	龍笛	龍笛	龍笛?	龍笛	龍笛	龍笛	龍笛?	龍笛?
全 長	34.6	23.9	40.1	残存34.0	22.2	39.7	(39.2)	40.4	40.3	40.3
頭部端	外 径	2.1	2.3	2.5	2.2	2.1	2.2	2.2	2.4	2.4
	内 径	1.8	1.6	1.5	1.4	1.6	1.3	1.3	1.5	1.5
管 尻	外 径	2.1	2.1	1.8	2.3	2.1	2.1	2.1	2.1	2.1
	内 径	1.3	1.2	1.3	1.4	1.4	1.4	1.4	1.4	1.4
節までの長さ		4.5	3.6	5.0	3.9	3.9	4.0	4.0	4.5	4.5
左端までの長さ	歌 口	6.5	10.6	10.2	(11.2)	10.6	10.2	(10.7)	10.6	10.7
	第1指孔	15.6	22.2	22.0	(22.5)	22.5	21.9	(22.5)	22.7	22.5
	第2指孔	18.0	24.8	24.4	(24.9)	24.8	24.4	(25.0)	25.2	25.1
	第3指孔	20.5	27.3	26.7	(27.2)	27.0	26.8	(27.35)	27.6	27.5
	第4指孔	23.0	29.5	29.0	(29.4)	29.2	29.2	(29.5)	29.7	29.7
	第5指孔	25.2	31.6	31.0	(31.6)	31.4	31.3	(31.65)	31.8	31.8
	第6指孔	27.8	33.7	33.0		33.4	33.2	(33.6)	33.8	33.8
第7指孔	30.1	35.6	34.9		35.3	35.0	(35.4)	35.6	35.6	
孔 径	歌 口	1.6	1.6	1.6	1.7	1.7	1.4	1.7	1.6	1.6
	第1指孔	1.1	1.4	1.4	1.4	1.3	1.2	1.2	1.4	1.4
	第2指孔	1.1	1.4	1.3	1.4	1.2	1.1	1.1	1.3	1.3
	第3指孔	1.1	1.3	1.3	1.3	1.3	1.1	1.1	1.3	1.2
	第4指孔	1.1	1.3	1.2	1.3	1.2	1.1	1.1	1.3	1.2
	第5指孔	1.0	1.2	1.2	1.2	1.1	1.1	1.1	1.3	1.2
	第6指孔	1.0	1.1	1.1	1.1	1.2	1.1	1.1	1.2	1.1
第7指孔	1.0	0.9	1.0		1.1	1.1	1.0	1.2	1.1	
各部分の外径	歌 口	2.1	2.6	2.1	(2.0)	2.4	2.2	2.5	2.3	
	第1指孔	2.0	2.1	2.1	(1.85)	2.4	2.1	2.2	2.2	
	第2指孔	2.0	2.1	2.1	(1.6)	2.3	2.1	2.2	2.2	
	第3指孔	2.0	2.1	2.1	(1.5)	2.3	2.1	2.2	2.2	
	第4指孔	2.0	2.1	2.1	(1.4)	2.3	2.0	2.1	2.2	
	第5指孔	1.9	2.0	2.0	(1.4)	2.3	2.0	2.1	2.2	
	第6指孔	1.9	2.0	2.0		2.2	2.0	2.1	2.1	
第7指孔	1.9	2.0	2.0		2.2	2.0	2.1	2.1		

所 産	石上神宮 神楽笛	彦根城 神楽笛	須須神社 高麗笛	須磨寺 高麗笛	西摩院寺 高麗笛
種 類	458	442	364	374	359
全 長	18	27	16	12	15
頭部端 内径	1.3	1.4	1.0	0.9	1.2
管 尻 外径	1.7	1.6	1.5	1.3	1.3
内径	1.2	1.2	0.9	1.0	1.1
節までの長さ	4.8	4.0	4.0	4.4	4.2
歌 口	12.2	10.7	9.2	10.5	9.5
第1指孔	25.4	24.1	20.4	21.2	20.0
第2指孔	28.2	26.8	22.6	23.3	22.2
第3指孔	30.8	29.4	24.6	25.6	24.4
第4指孔	33.3	31.8	26.5	27.6	26.4
第5指孔	35.6	34.2	28.4	29.5	28.4
第6指孔	37.7	36.5	30.1	31.3	30.1
歌 口	1.4	1.6	1.5	1.0	1.3
第1指孔	1.1	1.2	1.0	0.7	0.9
第2指孔	1.1	1.2	0.9	0.6	0.9
第3指孔	1.0	1.0	0.9	0.6	0.9
第4指孔	1.0	1.1	0.8	0.6	0.9
第5指孔	1.0	1.0	0.8	0.6	0.8
第6指孔	1.0	0.9	0.7	0.6	0.8
歌 口	2.0	1.9		1.4	1.7
第1指孔	1.9	1.9		1.4	1.6
第2指孔	1.9	1.9		1.4	1.6
第3指孔	1.9	1.9		1.4	1.6
第4指孔	1.9	1.8		1.4	1.6
第5指孔	1.9	1.8		1.4	1.6
第6指孔	1.9	1.8		1.4	1.6

(備考1) 振興会・日本芸術文化振興会
 歴博・国立歴史民俗博物館
 彦根城・彦根城博物館

(備考2) 単位はcm。「節までの長さ」は、頭部端から節の左端(頭部側)までの距離。「左端までの長さ」は、頭部端から各孔左端までの距離。「孔径」は、管頭から管尻に向かう方向の孔の幅。「各部分の外径」は、孔の中心位置における管の外径。

(備考3) 破損をさけて一部のみを計測した須磨寺の龍笛(朝日家の横笛)については、福井県和泉村笛倉料館の提示)内に記載されている数値を、()内に記した。そのうち「左端までの長さ」の数値は、頭部端から指孔中央までの長さである。

【 Summary 】

Report on Transverse Flutes Remaining in
Various Areas of JapanTAKAKUWA Izumi
NOGAWA Mihoko

Since *gagaku* was transmitted from old in various areas of Japan, there are many old *gagaku* instruments remaining in temples and shrines throughout Japan. Many of these instruments have been damaged, but it is possible to learn about the process of manufacture of flutes by observing the damaged parts. There are also examples of flutes in the collections of distinguished families that show a process of manufacture different from today's method. In this paper, *ryuteki* and *komabue* of Suzu Jinja in Ishikawa prefecture, *kagurabue* and transverse flute of Isonokami Jingu in Nara prefecture, *ryuteki* said to have been once owned by Minamoto no Yoshihira, *ryuteki* and *komabue* of Saigandenji in Kumamoto prefecture, three *ryuteki* of the former Tokugawa family of Kishu, and *ryuteki* and *komabue* of Sumadera in Hyogo prefecture, which is said to have been once owned by Taira no Atsumori, will be reported.

Of all these flutes, only the one at Saigandenji was made in a way similar to the typical manufacturing method used today. The *Kagurabue* at Isonokami Jingu uses bamboo in a different way from the way bamboo is used today, and the transverse flute is smaller than any of the existing flutes. The *komabue* of Suzu Jinja and the *ryuteki* of the former Tokugawa family of Kishu use Japanese paper and hemp thread instead of the bark of a cherry tree, which is usually used to wrap the bamboo. Yoshihira's flute and one other flute of the former Tokugawa family of Kishu are bound not by a thin strip but by a wider band of the bark of a cherry tree. These examples suggest that today's method of manufacturing flutes was not established until quite recently.

調査報告・各地に伝承された横笛



1. 須須神社の龍笛と高麗笛



2. 利家の詠



3. 龍笛のセミと榊



4. 樺下の経木



5. 歌口から指孔にかけて



6. 高麗笛のセミ



7. 石上神宮・神楽笛全図



8. 神楽笛・指孔間の下地と線刻された文字



9. 神楽笛・セミと歌口



10. 神楽笛・下地の経木と糸



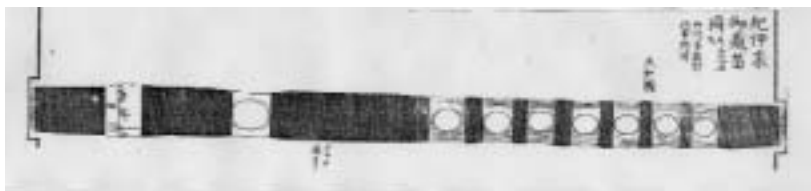
11. 石上神宮・七孔の笛



12. 七孔の笛・糸の様子



13. 紀州徳川家旧蔵龍笛・寛治丸



14. 『集古十種』



15. 寛治丸・セミ



16. 寛治丸・指孔部分



17. 彦根城博物館・斑鳩丸



18. 青葉の笛と箱



19. 青葉の笛・指孔部分



20. 青葉の笛・セミ



21. 紀州徳川家旧蔵龍笛・青柳



22. 紀州徳川家旧蔵龍笛・菊水



23. 青柳部分



24. 菊水部分



25. 彦根城博物館・神楽笛



26. 神楽笛・平樺巻



27. 神楽笛・セミ

69 調査報告・各地に伝承された横笛



28. 須磨寺
厨子に収められた笛



29. 龍笛部分図



30. 須磨寺の龍笛・セミ部分



31. 須磨寺高麗笛・全図



32. 須磨寺高麗笛・セミ



33. 須磨寺高麗笛・樺巻下地



34. 赤間神宮・青葉の笛と笛筒



35. 赤間神宮・笛箱の裏



36. セミの拡大



37. 西巖殿寺の高麗笛



38. 西巖殿寺・高麗笛のセミと樺巻



39. 西巖殿寺・龍笛とセミ（上がア・下がイ）



40. 西巖殿寺・龍笛樺巻の下地